

論文

子どもたちの組織化と越境的なネットワーク ——第一次世界大戦中の米国クロアチア民族協会青少年部

一 政 (野村) 史 織

Summary

The aim of this essay is to investigate how the youth department of the biggest Croatian immigrant organization, Narodna Hrvatska Zajednica (NHZ; the National Croatian Society), tried to organize, mobilize, and even unite Croatian immigrant children during WWI. The youth section of NHZ, Pomladak Narodne Hrvatske Zajednice (Pomladak NHZ; The Junior Order of the National Croatian Society), was established at the end of 1915 and grew exponentially during WWI.

Pomladak NHZ functioned as a fraternal and national organization for children of Croatian immigrant workers and provided aids, benefits, and other services for children and their families. This encouraged many immigrant families to let their children join Pomladak NHZ. The organization was also an important tool to create and reinforce the image of the nation and the race among the younger generation. More importantly, while it propagated their Croatian national consciousness, Pomladak NHZ supported the ideas of South Slavic and Slavic solidarity. This transnational movement helped encourage the U.S. society to accept Croatians and assist them in adjusting to their new surroundings more easily.

In conclusion, through their social and cultural activities, the media, and their fraternal network, Pomladak NHZ developed transnational links between branches of NHZ and Pomladak NHZ and other Croatian associations in the U.S., Europe, and the rest of the world. They also presented the formed but ever changing image of the nation and the race to Croatian immigrant children, which were closely associated with the political, economic, social, and cultural contexts in the U.S. and their homeland.

はじめに

19世紀終わりから20世紀初めにおいて、クロアチアからアメリカ合衆国（以下米国）への移民の多くは、出稼ぎ目的で出発した。これらの移民は、ダルマツィアなどアドリア海沿岸部からの長期にわたる小規模な人々の移動とは規模、目的、移民の構成など様々な点で違っていた。初期の移民は水夫、商人などの移動が主であり、北米東部の港や西海岸の果樹栽培、漁業、小規模経営の商業などに従事する者が多かった。しかし、19世紀半ば頃からクロアチア内陸部からミシガン、ペンシルヴェニア州などの鉱工業地へ流入する移

民が始まり、19世紀終わりにになると東部や中西部の鉱工業など急速に拡大する産業の労働力として、大規模な労働移民が本格化した。¹⁾ これらの移民も、以前の小規模な移民と同様、渡航費用を工面できる程度の小農民出身であったが、米国での職業では商業従事者は少なくなり、単純労働に従事する労働者が中心となった。²⁾ 1899年から1909年の間、クロアチア系とスロヴェニア系移民のうちの49.4%が一般労働者であり、さらに27.1%が農業労働者であったと報告されている。また、1899年から1909年の間のクロアチア系移民の85.1%が男性であり、92.5%が14歳から44歳の生産年齢層であった。³⁾ これらの移民の内訳から、移民の多くは、家族内で労働力となる男性であり、家族に送金するために米国へ出稼ぎ目的で渡航していたことがわかる。

クロアチアからの移民は、当時最大の移民集団となっていた東、南欧からの移民の一部であった。例えば、1901～10年の米国への全移民のうち71.9%が東、南欧からの移民であり、特に、イタリア、ロシアと並んで移民数が多かったオーストリア＝ハンガリー領内からの移民のうち70%以上がスラヴ系移民であった。⁴⁾ 当時のナショナリティーの分類上の混乱、統計の欠如、書類や旅券なしの非合法移民の存在等で正確な移民数には各説あるが、存在する統計や船会社の記録などから、第一次世界大戦前までのクロアチアから米国への移民数は60～80万人と推定されており、移民のピークである1907年には8万3000人が米国に入国したという。⁵⁾

以上のようなクロアチア系移民について、従来の歴史研究は、国民国家の国民史の一部として概観、整理するものを中心であった。⁶⁾ 確かに、クロアチア系と他のエスニックマ

¹⁾ Francis H. Etorovich and Christopher Spalatin, eds., *Croatia: Land, People, Culture* (Toronto: University of Toronto Press, 1970), 394–97.

²⁾ Emily Blach, *Our Slavic Fellow Citizens* (New York: Arno Press and The New York Times, 1969 [=1910]), 37, 45, 238. Gerald Gilbert Govorchin, *Americans from Yugoslavia: A Survey of Yugoslav Immigrants in the United States* (Gainesville: University of Florida Press, 1961), 82, 107. George J. Prpić, *The Croatian Immigrants in America* (New York: Philosophical Library, 1971), 123, 151. George J. Prpić, *South Slavic Immigration in America* (Boston: Twayne Publisher, 1978), 67.

³⁾ U.S. Congress, Senate, *Dictionary of Races or People, Reports of the Immigration Commission, vol. 5* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1911), 23, 25, 28.

⁴⁾ Prpić, *The Croatian Immigrants in America*, 103. U.S. Congress, Senate, *Abstracts of Reports of the Immigration Commission. Reports of the Immigration Commission, vol. 1* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1911), 64. U.S. Congress, Senate, *Emigration Conditions in Europe, Reports of the Immigration Commission* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1911), 17.

⁵⁾ Ivan Čizmić, *Hrvati u Životu Sjedinjenih Američkih Država* (Zagreb: ČGP DELO, 1982), 125–128. Josip Lakatoš, *Narodona Statistika*, 2nd ed. (Osijek: R. Bačić, 1914), 64. Prpić, *The Croatian Immigrants in America*, 396–99.

⁶⁾ Llubomir Antec, *Hrvati i Amerika* (Zagreb: Hrvatska sveučilišna naklada, 1992); Blach, *Our Slavic Fellow Citizens*; Ivan Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice: 1894–1994* (Zagreb: Golden Marketing, 1994); Čizmić, *Hrvati u Životu Sjedinjenih Američkih Država*; Etorovich and Spalatin eds., *Croatia*; Stephan Gaži, *Croatian Immigration to Allegheny County, 1882–1914* (Pittsburgh: Zajedničar, 1956); Govorchin, *Americans from Yugoslavia*; Prpić, *The Croatian Immigrants in America*; and Prpić, *South Slavic Immigration in America* など。

たは人種集団との関係を分析し、クロアチア系移民やクロアチア系アメリカ人の社会的、経済的地位や人種あるいは民族像の表象を分析しようとする研究も、1970年代から米国のエスニックスタディーズ、移民研究等で発展してきた。⁷⁾しかし、これらの研究も、米国史の一部として、あるいは各エスニック集団の自己のエスニック史として、移民の歴史を研究しがちであった。

一方、近年、国家の枠組みや国家関係という視点だけでなく、グローバルな視点から移民の主體的な移動戦略やネットワークの構築に注目する視点が提示され、国民国家を批判的に相対化し、国民、民族、人種、あるいはエスニック集団などの集団の枠組みの構築を人種、ジェンダー、階級など多様な視点から問う研究が進展している。⁸⁾日本の移民研究においても、山本⁹⁾や一政(野村)¹⁰⁾が、米国の東欧系移民の集団意識やネットワーク構築の越境性に注目している。

これらの研究で重要な概念は、越境的な形で展開する民族運動や米国でのアメリカ化運動の中で築かれていく人々のネットワークやアイデンティティの多様性、そして、「クロアチア人」「白人」「アメリカ人」など、国民、民族、そして人種概念の構築過程の批判的な再検討であろう。例えば、山本は、19世紀後半から20世紀初頭のハンガリー王国から米国への移民の研究で、ハンガリー王国と米国間を双方向で移動する人々を主体として捉えることで、多様で変容する人的結合のネットワークや集団の構築を同化・文化変容の強調よりもアイデンティティの構築・維持から問い直している。山本によれば、「ハンガリー人」等の集団の枠組みは、移民達の人的結合の形成やその相互作用、他集団との関係、そして、送出社会や受入れ社会における移民集団のイメージの表象や移民政策など、様々な政治、社会、経済、文化的背景の中で形成されたものだという。故に、それらは米国や故郷の社会、政治的文脈などでダイナミックに変容し、かつ重層的なものだという。この考えに基づき、山本は、ハンガリー王国からの移民を、均一な国民集団やエスニック集団として「ハンガリー人」「スロヴァキア人」などと分類し、それらを分析の単位にすることを否定した。そして、家族、宗教団体、労働組合、エスニック集団などの様々なレベルの人的結合に焦点を当てて、グローバルな形で移動を繰り返す人々が、いかに多様で変容する人的結合のネットワークの中で生活し、また、新たに人的結合を作り出して、戦略的に所属を選択していったかを描き出した。そして、この過程で、「ハンガリー人」「スロヴァキア人」「白人」といったエスニックな概念や人種概念が構築されていき、移民たちの社会的結合が再びエスニシティやジェンダー、階級などにそった枠組みや秩序のもとに再編され、多元化して

⁷⁾ John Bodnar, *Immigration and Industrialization, Ethnicity in an American Mill Town, 1870-1940* (Pittsburgh: University of Pittsburgh Press, 1977); John Bodnar, "Materialism and Morality: Slavic-American Immigrants and Education, 1890-1940," *The Journal of Ethnic Studies* 3, no. 4 (1976): 1-19 など。

⁸⁾ Donna R. Gabaccia, *Foreign Relations: American Immigration in Global Perspective* (Princeton and Woodstock [Oxfordshire]: Princeton University Press, 2012) など。

⁹⁾ 山本明代『大西洋を越えるハンガリー王国の移民——アメリカにおけるネットワークと共同体の形成』(彩流社、2013年)。

¹⁰⁾ 一政(=野村) 史織「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化—クロアチア民族協会を中心に」柴宜弘他編『東欧地域研究の現在』(山川出版、2012年)、225-241頁。野村(=一政) 史織「移民労働者と「民族」——合衆国におけるクロアチア民族協会成立」『ODYSSEUS』第13号(2012年)、47-67頁。

いったことを示した。¹¹⁾

一方、クロアチアからの移民については、一政(野村)が、19世紀末から20世紀はじめのクロアチアからの移民労働者に注目し、クロアチア系移民組織として最大であったクロアチア民族協会(Nardona Hrvatska Zajednica (NHZ) [the National Croatian Society (NCS)]) (以下、NHZ) がいかにコミュニティの中で生まれ、どのように労働者を越境的なネットワークにも関わらせる形で組織化していったかを明らかにした。その研究によれば、設立以降、NHZは、保険制度、労働者扶助活動、そして、米国での生活支援や故国の情報提供、文化、教化活動などを通して、その多くが移民労働者であった会員を、ローカルな支部に結び付けることで次第に組織化したのだという。一方、19世紀終わりから20世紀はじめにかけて、NHZを中心に、クロアチア系移民の移民協会やメディア、移民コミュニティのリーダーたちは、当時故郷で高っていたオーストリア＝ハンガリーからの独立運動、国民国家形成運動と越境的に関わり合う言説や活動を生み出していた。とりわけ、NHZの主要メンバーが中心になって、当協会が後押しする形で、1912年にクロアチア同盟を成立させると、協会が主導するクロアチア系移民に対するアメリカ化運動と民族的な言説に基づく集団意識の構築が目立つようになった。このような集団意識の構築と同時進行で、協会は、第一次世界大戦前までに、ユダヤ人の入会を排除し、「クロアチア人」の組織としてますます多くの移民を各支部に結び付け、保険、扶助制度等を完成させたという。¹²⁾

以上のような研究は、主に男性移民たちがどのように越境的な形で組織化されていたのか、また、どのように人種概念や民族像などの構築とともに集団の枠組みが形成されていたのかを示した点で、大変重要である。しかし、東欧からの移民コミュニティが急速に発展した20世紀初めの時期、その発展に寄与したのは出稼ぎ目的の男性労働移民だけではなかった。実際、家族呼び寄せなどの結果、女性移民の数が1904年頃から次第に増加し、移民たちは家族をもって定住する傾向が強まっていた。¹³⁾ 多くの出稼ぎ目的の男性たちも、実際には米国にとどまるようになった。多くの研究者がクロアチアやスロヴェニアからの移民のうち約三分の一から四分の一しか帰国しなかったと推定している。¹⁴⁾ また、1880年から1914年までの34年間に、50万人以上のクロアチア人が国を離れ、そのうち四分の一しかクロアチアに戻ってこなかったと述べる研究者もいる。¹⁵⁾ こうして、第一次世界大戦前にはより多くの一世が米国への定住志向を示すようになった。同時に、米国で誕生した二世や呼び寄せられた子どもたちなど、若い移民の数も増加し始めた。

しかし、コミュニティが発展していったこの時期に、当時増加していた女性や子供たち

¹¹⁾ 山本『大西洋を越えるハンガリー王国の移民』、189–202、233–44頁。

¹²⁾ 一政(=野村)「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化」、225–241頁。野村(=一政)史稿「移民労働者と「民族」、225–241頁。

¹³⁾ Prpić, *The Croatian Immigrants in America*, 152.

¹⁴⁾ Etorovich and Spalatin, eds., *Croatia: Land, People, Culture*, 161. Dirk Hoerder, ed., *Labor Migration in the Atlantic Economies: The European and North American Working Classes during the Period of Industrialization* (Westport and London: Greenwood Press, 1985), 400, 406. Lakatoš, *Narodona Statistika*, 64.

¹⁵⁾ Govorchin, *Americans from Yugoslavia*, 10, 15.

がどのように移民組織に参入したのか、そして、それがどのように越境的な文脈の中で行われていたのかは、東欧系移民の分野ではまだ十分研究されているとは言えない。そこで、本稿では、前述のクロアチア系移民最大の移民組織であるNHZの青少年部に注目する。青少年部は、コミュニティが発展し、米国ではアメリカ化運動、故郷ではオーストリア＝ハンガリーからの独立運動が高まった第一次世界大戦中に設立され、大戦中に急成長を遂げた。分析の中心は、青少年部設立の1915年末から第一次世界大戦後、欧州にセルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人王国が成立した1918年12月を経て、大戦後の講和会議の始まる1919年1月までとする。女性移民については資料が少ないが、青少年部の運営、機関紙の発行などで一世の女性たちも役割を果たしていたので、本稿では、女性たちの役割にも目を配りながら、協会の会員規約、議事録、青少年部の機関紙、ならびに、百周年を記念して1994年に各支部が本部に提出した歴史調査と沿革の報告書を資料として分析する。そして、子どもたちがどのようにNHZや青年部とその越境的なネットワークに組み込まれ、また、集団の枠組みを提示されたのかを考察したい。

1. クロアチア民族協会と青少年部の設立

(1) クロアチア民族協会 (NHZ)

ここでは、まず、青少年部の母体であるNHZについて概観する。NHZは、クロアチア系移民労働者が最も集中していたペンシルヴェニア州ピッツバーグを中心に、ペンシルヴェニア州のアレゲニーシティー（今日のピッツバーグノースサイド）(Allegheny City)、マッキーズポート、(McKeesport)、エトナ (Etna)、ジョンズタウン (Johnstown)、ブラドック (Bradock)、そして、ウエストヴァージニア州のホイーリング (Wheeling, WV) の6つのクロアチア系移民組織を統合する形で、アレゲニーシティーで在米クロアチア協会 (Hrvatska Zajednica za Sjedinjene Države u Americi [the Croatian Society in the United States of America]) として1894年に設立された。協会は、1897年にクロアチア民族協会 (Narodna Hrvatska Zajednica (NHZ) [the National Croatian Society (NCS)]) と改称され、1906年には同協会の機関紙として、『友愛』(Zajedničar [The Fraternalist]) の発行が始まった。¹⁶⁾ 設立当初の会員総数は約600人、保有資金も42.50ドル程度であったが、クロアチア系移民、特に、クロアチア系移民労働者向けの有力な互助、民族組織として急速に発展し、1918年には支部数414、会員数3万7658人、保有資金は15万ドルになった。¹⁷⁾ さらに、1926年にクロアチア友愛協会 (Croatian Fraternal Union (CFU)) に改称され、現在に至るまで、クロアチア系移民やクロアチア系アメリカ人にとって最大かつ最も重要な組織であり続けている。

NHZは、まず第一に移民労働者を意識した互助組織であった。1994年に協会創立百周年を記念して、各支部がその歴史を文書にまとめてCFU本部に提出している。その報告

¹⁶⁾ Sally M. Miller, ed., *The Ethnic Press in the United States: A Historical Analysis and Handbook* (New York, Westport and London: Greenwood Press, 1987), 46.

¹⁷⁾ Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*, 94.

集を見れば、協会の成立と初期の運営に大きな役割を果たした各支部は、移民労働者を結束させる形で成立し、活動を展開していたことが明らかである。統一的な協会が成立する前の各団体の名称も「労働者」を冠しているものが多く、NHZ発足後は、クロアチア系移民、特に移民労働者の扶助のために各地に存在していた小さな団体やその後各地で組織されていった団体が、NHZに支部として連なることで協会の拡大が続いた。例えば、アレゲニーシティーのアンテ・ストラチェヴィッチ博士クロアチア労働者互恵協会 (Hrvatsko Radničko Podupirajuće Društvo Dr. Ante Stračević, 1894年設立) は、その名の通りクロアチア系移民労働者の扶助を目的として成立した。この団体は、協会の第一支部となり、そのリーダーたちが協会の運営に中心的な役割を果たしていった。¹⁸⁾

NHZの本部、支部規約、憲章や設立許可請願書によれば、協会は当初はアレゲニー、のちにはピッツバーグに置かれた協会本部と、協会への参加を表明し、会員規約と憲章を受け入れ、本部より参加を許可された各地の支部会で構成されていた。会員は、地元の支部会に属しており、所属支部と本部への個人情報の提供、通常会費、特別会費、扶助金等の支払い、同支部会内での会員相互の扶助活動(見舞い、葬儀など)、支部会議参加等の義務が課せられていた。また、各支部会では毎年、会長、会計、書記などの役員が選出されており、協会本部が開催する総会に代表者を送っていた。そして、本部の最高役員と各支部からの代表者からなる年次総会や特別総会で、各支部からの報告、会員の情報、規約等の変更、役員を選出、会全体の方針等が話し合われた。また、これらの情報は、協会の機関紙『友愛』等で伝達された。以上のように、クロアチア民族協会本部の意向は、本部と連なる支部を通して、各会員へと伝達される仕組みとなっていた。¹⁹⁾

(2) 青少年部設立の経緯

協会の若い世代との関わりは、NHZの支部、本部のしくみとその活動に沿う形で展開した。青少年部の設立の経緯は以下の通りである。1915年末にクリーヴランドでのNHZ第12回大会において、ピッツバーグノースサイドの第一支部代表であり、1912年から1921年ま

¹⁸⁾ Croatian Fraternal Union of America (CFU), *The First 100 years: A History of CFU Lodges, 1894–1994* (Pittsburgh: Croatian Fraternal Union of America, 1994), 5.

¹⁹⁾ Hrvatska Zajednica, *Pravila, Hrvatske Zajednice u Sjedinjenim Državama* (Pittsburgh: Hrvatska Zajednica, 1894, 1895). Croatian Society, *By-Laws of the Croatian Society of United States of America* (Allegheny, PA: Croatian Society, 1896). Hrvatska Zajednica, *Pravila, Hrvatske Zajednice u Sjedinjenim Državama* (Allegheny, PA: Hrvatska Zajednica, 1896). In the Court of Common Pleas of Allegheny County Pennsylvania, June 1897, no. 617. NCS, *By-Laws of the National Croatian Society of the United States of America*. (Pittsburgh and Allegheny City: NCS, 1897, 1898, 1900, 1904, 1906, 1909). NHZ, *Pravila i Zakoni Narodne Hrvatske Zajednice u Sjedinjenim Državam Sjeverne Amerike* (Allegheny City: NHZ, 1897, 1898, 1900, 1904, 1906, 1909). NHZ, *Ustav i Pravila Narodone Hrvatske Zajednice u Sjed. Državama Amerike* (Pittsburgh: NHZ, 1912). NCS, *Constitution and By-Laws of the National Croatian Society of the United Sates of America* (Pittsburgh: NCS, 1912). NHZ, *Zakoni i Pravila Narodone Hrvatske Zajednice u Sjed. Državama Amerike* (Pittsburgh: NHZ, 1915, 1918). NCS, *By-Laws and Rules of the National Croaian Society in the U.S. of America* (Pittsburgh: NCS, 1915, 1918). 一政(=野村)「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化」、231–235頁。

でNHZ会長を務めたヨシップ・マルホニッチ (Josip Marhonić) の呼びかけで青少年部の設立が決定された。書店経営者であったマルホニッチは、小規模な出版社を立ち上げたこともあり、フラニョ・ボガデック (Franjo Bogadek) による最初の英語・クロアチア語辞書の出版を手掛けた人物でもあった。²⁰⁾ こうして、NHZの本部、支部のネットワークの中に、米国クロアチア民族協会青少年部 (Pomladak Narodne Hrvatske Zajednice u Sjedinjenim Državama Amerike [Junior Order of the National Croatian Society of the U.S.A.] (Pomladak NHZ)) が成立した。1916年5月からは、青少年部機関紙『クロアチア民族協会青少年部』(Pomladak Narodne Hrvatske Zajednice [The Junior Order of the National Croatia Society])²¹⁾ が、英語でクロアチア語の基礎を教える半頁程度の小さなコラム以外、全ページクロアチア語で発行されるようになった。青少年部は、その本部をNHZ本部があるピッツバーグに置き、NHZの女性会員ダニツァ・ラチュキ (Mrs. Danica Rački) が青少年部会長を務めた。また、青少年部機関紙各号で会計報告が記載されたが、会計報告にはNHZ本部の会計長(財務部長)の名前が併記されていたことから、青少年部本部はNHZ本部内に置かれ、NHZ役員が運営、監督にあたったことが伺える。²²⁾

発行された青少年部月刊機関紙1916年5月号には、設立時から1916年4月までに設立された青少年部の全支部の名称、住所、運営役員名、会員名簿、会計報告等が掲載されている。それらによれば、1916年4月24日の時点で青少年部50支部を有し、資金総計265ドル、会員数1633名、保有資金265ドルであった。²³⁾ 印刷不鮮明で名前が不明、または、両性に使用できる名の会員を除いても、どの青少年部支部でも会員数の三分の一から半数程度が女兒であった。また、各支部に姓の同じ子どもたちが複数存在することから、兄弟、親類で入会した者も多かったと思われる。もちろん、これは連鎖移民が多かったことの反映でもあろう。各支部の規模は、10人前後から100人以上までさまざまであったが、クロアチア系移民コミュニティが発展していたペンシルヴェニア州、イリノイ州など東部や中西部に特に多くの支部と会員を抱えていた。ただし、東部や中西部だけでなく、西部や太平洋岸などにも青少年部支部が設立されていた。(表1)

²⁰⁾ CFU, *The first 100 years*, 5.

²¹⁾ 1917年11月からは時に隔月発行、1921年に *the Junior Magazine* (隔月発行、1921-) に引き継がれた。(Miller, *The Ethnic Press in the United States*, 50.)

²²⁾ *Pomladak Narodne Hrvatske Zajednice (The Junior Order of the National Croatia Society)* no. 1-34 (Pittsburgh: Pomladak NHZ, May 1916-January-February 1919).

²³⁾ 名簿自体の誤り、印刷不鮮明等で集計にわずかな誤差が生じた可能性がある。ただし、機関紙5月号に掲載されたNHZ会長マルホニッチのメッセージでは、会員数は「約1600人」とあったので、ほぼ正確な数に近いと思われる。*Pomladak* (May 1916): 3.

表1 NHZ青少年部支部所在地と会員数(1915年12月～1916年4月)

州名	支部所在地(会員数)	支部数	会員数
コネティカット州	Hartford (24)	1	24
ニュージャージー州	Hoboken (28)	1	28
ペンシルヴェニア州	Johnstown (54), Fayette City (37), Rochester (24), Brier Hill (17), Pittsburgh (38), Export (12), Bessemer (Lawrence) (40), Etna (45), Versailles (11), Homestead (28), Duquesne (16), Uniontown (20), McKees Rocks (14), Ambridge (44), McKeesport (10), Rankin (33), Clairton (9), Van Meter (7), Kaylor (26)	19	485
オハイオ州	Lorain (28), Youngstown (61)	2	89
インディアナ州	Gary (33)	1	33
ウィスコンシン州	Milwaukee (16)	1	16
イリノイ州	Brereton (28), Christopher (28), Lincoln (13), Mathersville (36), Steelton (73), Chicago (40), Wood River (23), St. Davids (87), Madison (33), Canton (24), Johnston City (15)	11	400
ミネソタ州	Eveleth (20)	1	20
アイオワ州	Rathbun (50), Albia (24)	2	74
ミズーリ州	St. Louis (107)	1	107
サウスダコタ州	Lead (38)	1	38
ネブラスカ州	Omaha (17)	1	17
カンザス州	Kansas City (82), Ringo (21)	2	103
コロラド州	Denver (25), Pueblo (19), Crested Butte (42)	3	86
モンタナ州	Roundup (27)	1	27
ワシントン州	Roslyn (57)	1	57
カリフォルニア州	Los Angeles (29)	1	29
合計		50	1633

(注) 下線のあるものは1915年設立当時に発足したもの。支部所在地の()内の数字は、各青少年部支部の会員数。²⁴⁾

設立以来、青少年部は急速に成長し、1916年8月には支部数74、会員数2705人、保有資金1038.56ドル、1917年1月には、86支部、3398会員、2623.64ドルとなった。米国の対ドイツ宣戦布告があった1917年4月には90支部、会員3850人、多くのクロアチア系移民がその臣民であったオーストリア＝ハンガリーに対する米国の宣戦布告があった1917年12月には、支部数117、翌年1918年2月には、支部数は117と変わらないものの、会員数5375人、総資産8396.85ドル、同年8月には、支部数は132、会員数6425人、総資産1万2074.84ドルへと増大した。そして、1918年11月の休戦後、講和会議の始まる1919年はじめには、支部数は前年後半からさほど変わらない133支部であるが、会員数は6753

²⁴⁾ Ibid., 4-7, 10-11に記載の支部住所録、会員名簿より著者作成。

人に増加し、総資産額も約1万5500ドルになった。第一次世界大戦中に、青少年部支部は、そのネットワークを広げ、支部、会員数、資産額ともに激増していったことが明らかであった(図1)

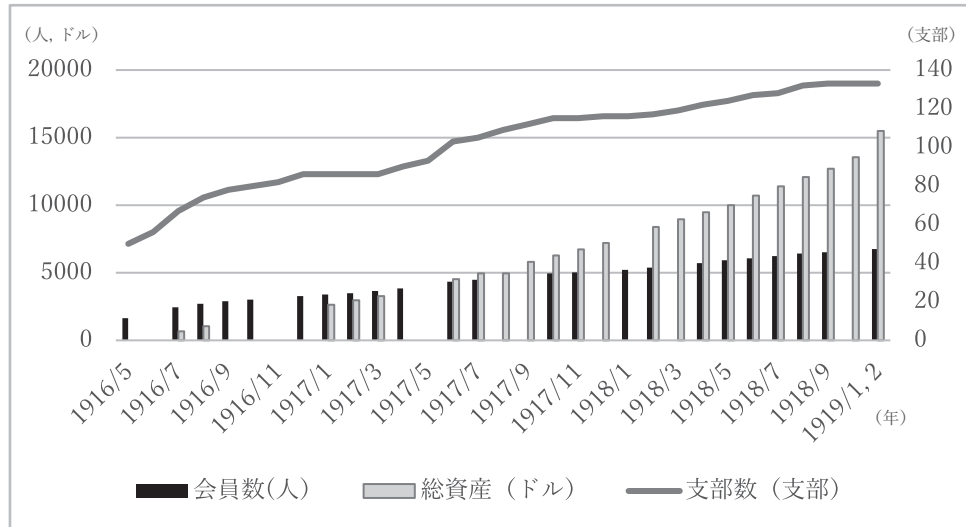


図1 青少年部支部の発展²⁵⁾

2. 青少年部の発展とその特徴

(1) 扶助、保険制度

NHZ青年部の発展と子どもたちの組織化は、NHZによるクロアチア系移民、特に移民労働者の保護と組織化と密接なかかわりを持っていた。まず、青少年部は単に子どもたちのための文化、教育機関であるだけではなかった。1917年1月号より青少年部機関紙に掲載された会費についての記載によれば、すべての会員は、入会金として25セント、会費として月額15セントを支払うことになっており、会費未納が続くと除名処分となった。また、会員が死亡した場合は、親または後見人に100ドルが支払われることになっており²⁶⁾、1917年2月までに、計4名に対し死亡見舞金各100ドルが支払われていた。²⁷⁾ さらに、毎月の会計報告²⁸⁾によれば、各支部で集金された財源から、会員数に従って算出された一定金額が本部に納められ、青少年部の資金として貯蓄されていた。これらの資金は、教育、文化活動のためだけでなく、未成年の会員への死亡保険金等の財源として積み立てら

²⁵⁾ Pomladak (May 1916–Jan-Feb.1918)の会計報告、支部住所録、会員数報告などより著者作成。会員数と総資産については、記載がなかった月は空欄とした。

²⁶⁾ Pomladak (Jan. 1917): 6. Pomladak (May 1917): 7など。

²⁷⁾ Pomladak (Feb. 1917): 3.

²⁸⁾ Pomladak (May 1916–Jan-Feb.1918).

れていたと考えられる。1916年5月の会計報告では、会員が10人程度の小さな支部で1.5～2ドル程度、大きな支部で40ドル以上、計265ドルが本部に納められた。会員数が増大した1917年はじめには支部から本部へ納められる額は毎月400ドル以上、1918年はじめには500ドル以上、1919年はじめには800ドル以上となり、青少年部の保有資金は1919年はじめには1万5000ドル以上となった。1918年9月には、シカゴでのNHZ第13回総会と同時に青少年部の第一回大会が開かれ、2歳児から青少年部に会費減額で参加できると決定され、保障の対象となる子どもたちの範囲がさらに広がった。これは、幼少期より協会と関われば、子どもたちが6、7歳で青少年部に正式に移行して、クロアチア語も勉強し始めるとの期待からだったという。ただし、乳幼児が入会することで、結果的には会員の死亡者数増加が予想されるので、既会員の会費は負担増になるとの報告があった。²⁹⁾

これらの保障、扶助機能は、NHZの創立当初からの最大の機能であった労働者にたいする扶助機能の一部をなしたと思われる。青少年部機関紙では、北米のNHZ青少年部の取り組みに対する次のような評価を書いた南米からの通信文を紹介している。

北米からの声も届いている。北米では多くの工場で私たち兄弟がたくたくたになるまで働いていた。また、工場では、そのように疲弊した私たち民族の兄弟たちの小さな子どもたちや息子たちも働いていた。NHZに後押しされて、青少年部を運営し、自由の時代の未来のために準備している支部が増えている。そして、このような運動全体は、南スラヴ民族の成熟性を証明しているのだ。³⁰⁾

この記事では、後述する南スラヴの民族として当時連帯が説かれていたクロアチア系、スロヴェニア系、セルビア系移民の子どもたちについて記述されている。そして、南スラヴ系移民の子どもたちが児童労働に従事している姿が描かれている。さらに、このような労働者を扶助する機関として、NHZとその青少年部は存在していると語られている。実際、母体のNHZは、労働者がその大多数を占める会員の互助を第一の目的としていた。この扶助機能は、クロアチア系移民がNHZに入会する（または、地元のクロアチア系やスロヴェニア系移民たちの小さな扶助組織がNHZに参加する）もっとも重要な理由の一つであった。³¹⁾

しかし、NHZや青少年部の扶助機能は、児童労働に従事する子どもたちの支援に特化されたものではなかった。NHZの社会保障機能、特に、会員やその家族に対する保険制度こそが、労働者に対する互助活動とそれに伴う組織化の過程で、その家族である女性や子どもたちに提供されたものであった。保険制度は、NHZの機能の基礎であり、会員数や協会運営の発展とともに会員への保険制度も発展していった。協会に数千人の会員しかいなかった初めの数年間でさえも、死亡者保険、障害者の援助金などが存在しており、

²⁹⁾ *Pomladak* (July 1918): 3. *Pomladak* (September 1918): 3.

³⁰⁾ *Pomladak* (August 1917): 6.

³¹⁾ 例えば、1894年9月14日に設立され第一回大会参加後にNHZに参加したマッキーズボートの第三支部が、クロアチア民族協会参加の理由は、「経済的な保護と文化維持のためのクロアチア系の人々の統一のため」だったと述べている。CFU, *The First 100 Years*, 6.

会員数が急速に増大し、協会が勢力を増してきた1902年のNHZ第七回大会頃から、保険制度はさらに充実したものになった。この当時は、NHZの会員死亡時に800ドル、配偶者の死亡時に400ドルまで保険金が増額され、会員は月々50セント支払うこととなった。1902年9月15日までに、NHZは、28万3420.82ドルの保険金を米国や欧州の会員やその家族に払っており、1900-02年の2年間で少なくとも17万9234.70ドルを支払っていた。³²⁾ NHZの議事録によれば、1902年9月16日から1904年8月31日までにNHZが会員に支払った保険金や援助金は、総計30万4293.80ドルであった。その内訳は、死亡保険21万5800.30ドル、配偶者死亡保険5万5400.00ドル、傷害保険2万9833.33ドル、まだ記録されていなかった死亡者への支払い1853.17ドル、疾病保険1407ドルであった。³³⁾ チズミッチによれば、第一次世界大戦前の何年かが、NHZの発展の中で、最も成功を収めた時であったという。彼の調査によれば、1912年のカンザスシティーでの大会以降は、疾病保険の支給は三年間にまで延長された。この時点で、本会員数は2万4532人、配偶者(準会員)5642人、計3万174人の会員が存在し、支部数は473となった。さらに、1913年だけで6625人の新会員が協会に入会した。³⁴⁾ テリシュマンも、1912年から1926年の間に、NHZは強力な社会組織として労働者階級の会員たちを支援していく制度を整えたとしている。³⁵⁾ また、この過程で、協会は、労働災害で死亡・障害を受けた家族の援助や死亡会員の子どもの保護³⁶⁾、その解決法としての孤児院の建設計画³⁷⁾など、子どもに対して行う扶助活動も進めたのであった。

こうした保険や扶助機能が基礎となって、移民やその家族と協会の結びつきが進んでいったと思われる。例えば、結婚、子の誕生などの報告や会員の死亡や疾病等での家族への扶助金支払いで、米国や故郷の家族と協会が結びつくこととなった。さらに、準会員枠の設定、青少年部の設置などを通じた扶助機能の充実は、女性や子どもたちの協会や青少年部加入も促し、家族全体がNHZに結びつく一つのきっかけとなったと言えよう。青少年部の扶助機能は、NHZ全体の保険制度の発展、労働者保護などの互助機能を通じた移民とその家族の組織化の中で生み出されたものだったと言えよう。

(2) 民族意識とアメリカ化運動

一方、NHZは、設立以降、故郷の民族運動や民族意識の高まりを受け、越境的な形で米国でも民族主義的な運動を展開し、クロアチア人という民族意識を鼓舞した。テリシュマンは、青少年部が成立した大きな理由として、クロアチア系移民の民族意識を挙げている。彼によれば、コミュニティが発展し、二世が増えるにしたがって、より多くの若い会

³²⁾ Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*, 51, 107.

³³⁾ Zapisnik VIII. Konvencije Narodone Hrvatske Zajednice, 26 September–5 October, 1904 (St. Louis, MO: NHZ), 25.

³⁴⁾ Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*, 94–6, 108.

³⁵⁾ Tihomir Telišman, “Hrvatska braska zajednica kao socijalna organizacija hrvatskih iselenika u SAD,” *Migracijske teme* 2, no. 1 (1985): 74.

³⁶⁾ Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*, 53, 105–6.

³⁷⁾ Zapisnik VIII. Konvencije, 22.

員にNHZに入会してもらい、彼らにクロアチア語やクロアチアの文化、民族意識を継承してもらい、コミュニティの発展、民族集団の発展を担ってもらおうという課題が生まれたという。そして、これらの問題の解決のためにNHZ青少年部が1915年終わりに設置されたと主張している。³⁸⁾

確かに、青少年部の会長ラチュキやNHZ本部役員から青少年部機関紙に寄せられたメッセージを見ると、青少年部の会員である子どもたちが、のちにNHZに移籍し、協会やクロアチア系移民集団を担っていくものとして語られている。例えば、ラチュキは、青少年部の会員にクロアチア語の学習、集会への出席、青少年部の支部長など大人たちの言うことをよく聞くことなどを説いた。そして、このような努力によって、「若いクロアチア人たちは、クロアチア人全体の民族の歴史の中で、すばらしい歴史の一ページに」なり、将来的には「より大きな私たちクロアチア人の協会の有益な会員になる」と述べている。³⁹⁾

また、各支部でのエスニックな文化教育活動は、移民たちに集団意識を広める一つの重要な要素であり、これらの活動はテリシュマンが述べたように、クロアチア本国での民族意識形成や民族運動と結びついていると言えなくもない。1917年2月の青少年部年次報告では、青少年部会長のラチュキが、86支部のうち27人の支部長がクロアチア語の読み書きを教える学校を作ったと報告している。また3398人の会員のうち、1156人がクロアチア語の読み書きが可能で、その多くが、クロアチア語を教える学校や教育施設をもつ「クロアチア人コロニー」出身であると述べている。⁴⁰⁾ さらに、NHZやその青年部の多くの支部で、クロアチアの歌や演奏、詩歌朗読などのクラブ活動が展開された。⁴¹⁾

このような民族意識の強調は、NHZの特徴と一致していた。設立当初からNHZの会員規約では、協会の目的として、「会員を自国の真の息子にすること」が強調されており、会員資格を18歳から45歳のクロアチア語を理解し話す者としていた。⁴²⁾ 2年後の規約では、会の目的は、「在米のクロアチア民族の精神的かつ物質的利益を促進すること」と記載され⁴³⁾、1904年には、入会資格者は「クロアチア人またはクロアチア語を話す18歳から45歳のキリスト教徒」⁴⁴⁾とされ、1906年からはユダヤ人が入会非不適格者として明文化された。⁴⁵⁾ さらに、NHZは、米国社会に向けて、クロアチア人としての民族意識を誇示しようと、1900年と1911年に、オーストリア人ではなくクロアチア人として認識するよう米国政府に求める運動も展開した。⁴⁶⁾ また、NHZはクロアチアの政治動向に関心を持ち、故郷での民族運動を経済的、政治的に支援した。こうした中で、第一次世界大戦までに、

³⁸⁾ Telišman, “Hrvatska braska zajednica,” 71.

³⁹⁾ *Pomladak* (February 1917): 3.

⁴⁰⁾ *Pomladak* (February 1917): 3.

⁴¹⁾ CFU, *The first 100 years* を見よ。

⁴²⁾ Hrvatska Zajednica, *Pravila* (1894), 3.

⁴³⁾ Croatian Society, *By-Laws*, 24.

⁴⁴⁾ NCS, *By-Laws* (1904), 43.

⁴⁵⁾ NCS, *By-Laws* (1906), 28.

⁴⁶⁾ Čizmić, *Hrvati u Životu Sjedinjenih Američkih Država*, 264. Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*, 137. Telišman, “Hrvatska braska zajednica,” 71. *Zapisnik VI. Konvencije Narodone Hrvatske Zajednice* (Wheeling, WV: NHZ (NCS), 27 August–2 September, 1900), 13.

セルビア、スロヴェニアなどの各エスニック組織も成長する中で、「クロアチア人」ではない会員の移籍、支部組織のエスニックな線引きに基づく分裂等で、民族・エスニック集団の枠組みが可視化されていくようになった。

一方、当時、クロアチア民族主義を強化していく一方で、NHZはオーストリア＝ハンガリーからの独立を求めて故郷で高まっていた南スラヴ運動にも賛同して活動を展開していた。故郷での南スラヴ運動で主張されたユーゴスラヴィズム（南スラヴ主義）は、19世紀から20世紀はじめに故郷における民族意識の構築の過程で、クロアチア民族主義とかわりあいながら発展したものである。南スラヴ主義は、クロアチア、セルビア、スロヴェニア人など南スラヴの諸民族間の協調と政治的、文化的統一の促進を目指すものであり、クロアチアのエリート層を中心に支持されていた。⁴⁷⁾

当時故郷で広まった南スラヴ運動を米国のクロアチア系移民協会の多くが支持していたことは、米国、旧ユーゴ、クロアチアなどの多くの研究者がすでに指摘していることである。例えば、チズミッチは、クロアチア系移民の政治活動は、NHZに関係する二つの強力な政治的道具—協会の機関紙『友愛』と、1912年にクロアチア民族協会が中心になって設立された米国のクロアチア人の最大の政治同盟であるクロアチア同盟(Hrvatski Savez, the Croatian League)—によって発展したと述べている。第一次世界大戦中には、NHZが中心となって、クロアチア系移民を組織し、南スラヴ諸民族の統一国家を樹立させようという政治運動を展開した。そして、米国政府には、南スラヴの統一国家を目指す故郷や米国における運動を支持するよう訴え続けたのである。⁴⁸⁾

しかし、南スラヴ運動とクロアチア民族主義に関する言説は、単に故国とつながる民族意識の表出ではなく、在米のクロアチア系移民にとって特別な意味と役割を果たしていたようだ。⁴⁹⁾ 青少年部の南スラヴ主義とクロアチア民族主義の言説について、野村（一政）は、青少年部機関紙の1916年5月から1919年2月号に掲載された物語、詩歌、ノンフィクションやエッセイを分析した。野村によれば、青少年部機関紙は、平均8.6頁であり、a) 表紙、b) 機関紙の約半分を占める本部や支部会の記録、報告、お知らせ、通信等、c) 英語で教えるクロアチア語のコラム（19記事）、d) 物語やフィクション（157話）、e) 詩歌（25歌）、f) 啓発記事やエッセイ、ノンフィクション（全36、内、保健、健康関連5、歴史18、地理13記事。歴史や地理に関する計31の記事のうち、クロアチアの歴史や地理を扱ったものが26、他のスラヴ諸国の歴史や地理を紹介するものが4〔スロヴェニア2、セルビア1、ロシア1〕）、g) 挿絵や写真、という構成であった。野村は、このうち特にd)～f)を分析し、様々なジャンルの記事を横断する形で提示されていた「クロアチア人」という集団の枠組みの設定に、次のような特徴があると指摘した。まず、クロアチア人が、ヨーロッパ諸族に属

⁴⁷⁾ Ante Civalo, *The Croatian National Movement, 1966–1972* (New York: Columbia University Press, 1990), 13–16.

⁴⁸⁾ Čizmić, *Povijest Hrvatske Braske Zajednice*. Prpić, *The Croatian Immigrants in America*, 野村（一政）「移民労働者と「民族」、一政「越境的な民族意識の形成とアメリカ合衆国への同化」などを見よ。

⁴⁹⁾ 在米のクロアチア系移民の越境的な民族運動は、米国と故国両方の政治、社会、文化的要素と密接に関係しており、近年、その詳細な分析が始まっている。Ulf Brunnbauer, ed., *Transnational Societies, Transterritorial Politics* (München: R. Oldenbourg Verlag, 2009) 等参照。

する優れた特徴と栄光の歴史、領土を有する集団であるということが、歴史、文化、言語、地理だけでなく、人種や血統などの「生物学的」根拠も挙げられて繰り返し説明されていた。また、トルコ人が非欧州的な野蛮な他者として対置させられていた。そのほか、1917年の米国参戦後には米国と敵対関係となるドイツやクロアチアを支配していたオーストリア＝ハンガリーの「ドイツ人」、また、これらの帝国へ追従するクロアチアの「旧体制」の貴族なども他者として描かれていた。そして、善良な「農民」出身だが故郷では不当な抑圧に苦しみ、「自由」を求めて米国へ来た、文明的かつ市民権に足る集団として自己集団（「クロアチア人」）像が提示され、さらに、「スラヴ」や「南スラヴ」の人々も同じヨーロッパ諸族に属し、同じ苦しみを味わい、自由を求めている文明的な「兄弟」であるとして、彼らとの連帯が訴えられていた。⁵⁰⁾

このように、クロアチア人意識を強調し、かつ故郷の南スラヴ運動を支持するNHZ青少年部の言説は、各支部の様々な文化、教育活動に関わり合う形で機関紙や大会を通じて提示された。例えば、19世紀初めに一時「イリリア諸州」としてナポレオン統治下のフランスに統合されたイストラ半島は、1861年に統一されたイタリア王国にとって「未回収のイタリア領土」として獲得対象となっていた。一方、「イリリア人」が南スラヴ人の祖であるとの考えにより、1830-40年代にクロアチア人を中心として、民族言語、文化、政治運動が展開されており、これが後の南スラヴ運動の原型となっていた。⁵¹⁾ この地について、青少年部機関紙のある記事では、「私たちのイストラ（イストリア）の子どもたち」がクロアチア語を学ぶことさえもできず、イタリアの学校に行くよう強いられていたため、故郷と米国のクロアチア人の寄付でクロアチア学校を作った経緯が紹介されている。この記事で、イストリアはクロアチアに属すると強調され、「私たちクロアチア人は…イストラの地域を愛し、守らねばなりません」と訴えられた。⁵²⁾

このようにクロアチアの領土に関する強いメッセージを発する一方で、南スラヴやスラヴの連帯を訴える活動も高まった。当時故郷で広まり、米国の協会支部や青少年部でも実践された体育、体操運動であるソコル運動は、その一つの例であろう。青年部機関紙での報告によれば、20世紀初めにクロアチアでソコルの組織化がはじまり、それを受けて、米国のNHZや青少年部支部でもソコルが組織されたという。同紙によれば、これらの組織は、「スラヴ民族間に兄弟意識と互いに対する尊敬を目覚めさせ高める」こと、また、「クロアチア民族の文化をより完全なものとする」ことを目的としているという。⁵³⁾ また、青少年部は、クロアチア人、南スラヴ系の人々、そして、スラヴの人々が欧州や北米、南米など様々な地域におり、連帯しているというメッセージを繰り返し子どもたちに発した。例えば、「クロアチアやスラヴの地域のいろいろな場所出身の数千人が南米にいて、それはちょうど私たちがここ北米にいるのと同じようなのです」⁵⁴⁾、という紹介文付きで、南

⁵⁰⁾ Shiori Nomura, "Transnational discourses of the Nation and Race: Croatian immigrants during WWI in the U.S.A.," *The Komaba Journal of Area Studies* 10 (2007): 144-174.

⁵¹⁾ 伊藤孝之他監修『東欧を知る事典』（平凡社、1995年[=1994年]）、28-31、36-37頁。

⁵²⁾ *Pomladak* (June 1916): 4.

⁵³⁾ *Pomladak* (August 1916): 4.

⁵⁴⁾ *Pomladak* (June 1916): 8.

米チリのアントファガスタ (Antofagasta) のクロアチア人はじめ南スラヴ系移民たちの「ユーゴスラヴィア人学校」の建設と発展が紹介された。そして、その地からの通信文や学校新聞の転載記事が、青少年部機関紙に何度も掲載された。記事によれば、この学校は、「私たちユーゴスラヴィア人のコロニー」で最初に建てられたもので、「今日、私たちの民族の四分の一が戦場で死んでしまったとき」、学校が南スラヴの人々の連帯と発展を促す重要な手段になっていると強調された。⁵⁵⁾ また、アメリカ参戦後に掲載された、アントファガスタの学校の校長マルセル・コリン (Marcel Kolin) から北米のNHZ 青少年部の子どもたちへの挨拶では、南米の太平洋岸という「孤立した場所に、私たち民族の多くが移民したが、それらの民族の名前は、クロアチア人、セルビア人、スロヴェニア人、共通の名前はユーゴスラヴィア人」であると語られている。⁵⁶⁾

このように、第一次世界大戦中、青少年部も故国の自由のための戦いや南スラヴ主義を支持する活動や言説を生み出していたことがわかる。しかし、野村⁵⁷⁾ が指摘するように、これらの民族主義的な言説や越境的な民族運動は、アメリカ化運動と密接に絡み合って展開していた。つまり、クロアチア系の人々が米国社会に受け入れられ、また、社会上昇を図れるようにする戦略ともつながっていたのである。これは、NHZのもう一つ重要な特徴、つまり、アメリカ化運動に追従することで集団の社会上昇を目指していたという点を反映したものであった。NHZは、創設時の1894年の会員規約で、協会の目的を「会員を…より良い米国市民にすること」と謳い、会員の義務を「協会に参加後六年以内に米国市民になること」と規定した。⁵⁸⁾ また、同協会は、ごく初期から市民権獲得や英語の習熟など、米国社会への適応を促すための様々な提言を行い、米国市民になり得る「文明的な」クロアチア人像を提示してきた。⁵⁹⁾ これらの活動は、米国——彼らの言うところの「文明」社会——に自分たちが受容されることを狙った活動とも重なっていた。青年部の機関紙を見ても、故郷で展開されていた南スラヴ運動を支持するだけにとどまらず、文明的で自由を求めるヨーロッパ人の一派として、他のスラヴ、南スラヴ系の人々と米国でも連帯しようとのメッセージが溢れており、また、それらが、文明、善良、欧州、自由などのキーワードと結び付けられていたことがわかる。⁶⁰⁾

青少年部会長ラチュキは、会員に向けた二年目の挨拶で、「私たちクロアチアの子どもたち」は、青少年部を通して、協会の他のメンバーの中で重要で目立つ存在になり、また、「さまざまな民族の中でも顕著な存在」になったと述べ、「クロアチアとスロヴェニア民族への誇りと栄光を高める」よう、協会やその青少年部が努力していることを強調した。⁶¹⁾ また、青少年部の各支部や青少年部の母体であるNHZ本部や支部、また、関係諸組織は、

⁵⁵⁾ *Pomladak* (July 1917): 8. *Pomladak* (December 1917): 10.

⁵⁶⁾ *Pomladak* (August 1917): 6.

⁵⁷⁾ Nomura, "Transnational discourses of the Nation and Race."

⁵⁸⁾ Hrvatska Zajednica, *Pravila* (1894), 3–5.

⁵⁹⁾ Hrvatska Zajednica, *Pravila* (1897), 3; NHZ, *Pravila i Zakoni* (1898), NCS, *By-Laws* (1898), 7; NHZ, *Pravila i Zakoni* (1900); NCS, *By-Laws* (1900), 9; and *In the Court of Common Pleas* などを見よ。

⁶⁰⁾ Nomura, "Transnational discourses of the Nation and Race".

⁶¹⁾ *Pomladak* (February 1918): 3.

故郷の民族運動に経済的、政治的支援を続ける一方で、米国への忠誠心やその政策への支持を熱心にアピールし続けていた。例えば、1918年7月には、ペンシルヴェニア州の支部より戦争貯蓄切手の購買運動が成果を出しているとの報告などが機関紙で会員に紹介された。⁶²⁾ 社会改良運動、アメリカ化運動、戦時協力、そして、越境的な民族運動は重なりあって存在していた。青少年部の様々な言説や活動は、移民たちや故郷の人々を文明的で、独立すべき、米国では良き市民になるべき「クロアチア人」として認識するよう、米国政府や社会、そして、自己の移民コミュニティにも向けて発せられたメッセージだったと言える。

おわりに

以上のように、協会の子どもたちへの関わりや青少年部の組織化は、保険などの扶助機能や文化、教育活動を通じて労働者である会員とその家族を組織へと組み込む過程の一部として進展した。青少年部は、その母体のNHZの組織のあり方や方針に強く影響されながら、互助、扶助の機能をよりどころに、本部と支部のネットワークを充実させ、会員と支部、本部、そして、会員間相互の結びつきを生み出していった。しかし、この発展は、ローカルなレベルでの扶助機能をもとにした会員数の拡大と組織の充実を基礎に展開したものであった。

一方、母体のNHZは、米国、欧州、そしてその他の地域に広がる組織的な結びつきや、あるいは情報の交換の中で、特定の人種、民族像を提示していくようになった。特に、第一次世界大戦中、米国への戦時協力とアメリカ化運動への協調、故郷のナショナリズムや民族運動との越境的な関わりの中、NHZは、同化可能で文明的なクロアチア人像を構築しつつ、故郷の南スラヴ運動を支持するという方針を強めていく。このことは、青少年部と他のスラヴ系組織との連携、支部会の活動や運営方針、機関紙や大会での論調に大きな方向性を与えていった。

同協会の青少年部を通じた若い世代の組織への参入も、アメリカ化と越境的な民族、国家像にかかわる言説が形成される中で進行した。しかし、青少年部の民族的言説も、故郷のそれとは多くの点で違っていた。南スラヴの統一国家を求める運動を例にとっても、故郷の独立運動とは違って、青少年部の活動や機関紙では、スラヴ主義も南スラヴ主義も同時に宣伝されていた。そして、抑圧からの解放、自由を求める文明的な欧州の民族、「人種」集団として、(南)スラヴの連携が訴えられていた。これらは、故郷で高まっていた民族運動や民族的言説と一見すると極めて類似した内容であるが、実際は、米国社会に自己集団が受け入れられるように求める活動とも重なり合っていたのである。青少年部支部の文化、教育活動は、民族や人種概念との関連で意味を付与されて機関紙などのメディアを通して広げられたが、それは、米国や故郷の政治、社会、経済、文化的文脈の中で生み出され、変容し続けるものであった。

⁶²⁾ *Pomladak* (July 1918): 5.

1918年11月にオーストリアとハンガリーはそれぞれ休戦し、二重帝国も崩壊した。一方、1917年のコルフ宣言以降、セルビアの王権支配国家構想に対する反対意見も米国のクロアチア、スロヴェニア系組織から出され、戦後はイタリアによるイストラ半島併合などに反対して、米国政府への陳情活動も起こった。⁶³⁾しかし、米国の介入がないまま、セルビアを中心とした中央集権的な王国作りが進められ、米国における南スラヴ運動は衰退していった。こうして、戦間期に、NHZや青少年部の組織の在り方やそのネットワークへの会員たちの関わりはさらに変容していくのだが、それは次の研究でより詳細に検討したい。

⁶³⁾ Prpić, *The Croatian Immigrants in America*, 242–45.